

ゆるまる家

設計者／株式会社米田設計
施工者／佐藤産業株式会社



設計趣旨 CONCEPT

家に帰り、着替え、畳に座る。その瞬間素の自分に帰る。家にとって大切な要素はいくつかありますが、根本的なシェルターとしての役割と同じくらいに「自分に帰る事が出来る」は大切な機能だと思います。

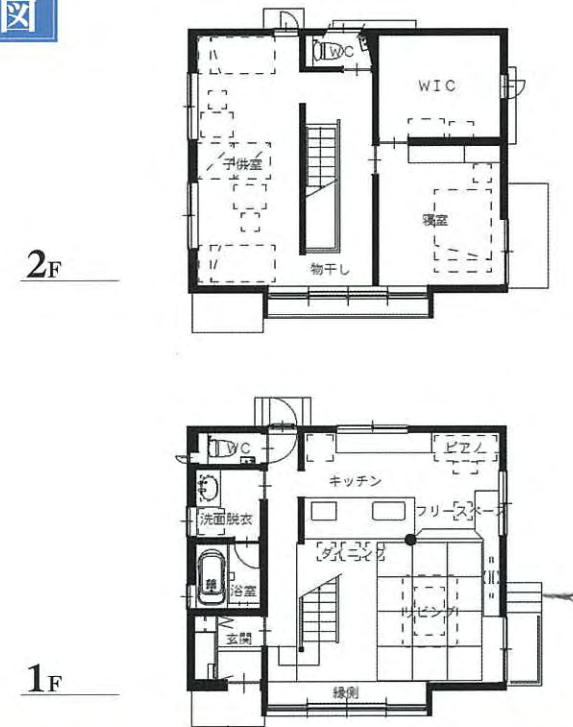
自分に帰る＝「ゆるまる」。身も心もゆるんだ状態へ帰る。格好つけ過ぎないことも住宅においては大切なことです。

畳での床座の生活はゆるまる家の建築主の原風景でもあります。洋式の生活が主流の現代に、生活スタイルと意匠面において無理なく畳を取り入れ、ゆったりと過ごせる家を目指しました。洋式の目線の高い生活と床座の低い目線を同居させるために、畳があるリビング全体のレベルを上げました。こうして生まれた段差は階段になったり、腰掛けになったりと有効に使用出来ます。また、外部からの視線防止のため、南の縁側を高い位置に設けることでこちらも腰掛けや昼寝の場所となります。畳でのんびりすることももちろんですが、それ以外でも工夫次第で各々の「ゆるまる」場所を見付けられる空間となりました。

リビングの床は全て構造的に独立しております。将来、バリアフリー化が必要になった時には構造体を傷めずにフラットな床にすることが可能です。



平面図



講評 REVIEW

自分に帰る＝「ゆるまる」身も心もゆるんだ状態へ帰ることの出来る場所としての住宅、若いご夫婦のための小住宅です。藤岡の古い住宅街に建つこのいえは、地場の瓦をつかった屋根に蔵を思わせる白壁により、この地域にかつてあったであろう風景を思いおこさせるたたずまいを見せています。南道路側の障子の大開口は町の行灯のようでもあり、町並みへの配慮もなされています。内部の1階は一段高いレベルとした畳のリビングを中心にキッチン、フリースペースをもつワンルーム、2階は個室となっています。1階リビングの床を上げる事でゴロンと横になった時のキッチンとの視線の高さを合わせ、南側の大開口の縁側をさらに一段高くすることにより外部からの視線との交錯を避けつつ開放感が得られるよう、床座をうまく生活に取り入れコンパクトでありながら、場所によって様々な視点や豊かな空間体験が楽しめ、くつろぐことの出来る、まさに「ゆるまる」のいえとなっています。畳により上げられたリビングの床は将来的にはずしてフラットな床とすることが可能な計画となっており、永く住み続けることができ、若い住まい手と共に成長して行くことの出来るすまいとなっています。

